

新村 出

山口市
(1876～1967)



重山文庫所蔵

【編著作】

- 『広辞苑』（昭和30・岩波書店）
- 『白芙蓉』遺歌集（昭和43・初音書房）
- 『新村出全集』全十五巻（昭和46、48・筑摩書房）

ほか

『広辞苑』の編者として著名な新村出は、明治九年（一八七六）、山口市山口町道場門前町に生まれた。東京帝国大学文科大学卒業後、同大学助教授、のち京都帝国大学助教授に転任し、同大学教授にて退官するまで言語学講座を担任し、近代日本の言語学の発展に寄与した。その功績により、文化勲章を授与され、京都名誉市民の表彰を受けた。

新村は、言語学研究の傍ら、短歌にも造詣が深く、随筆にも非凡なものがあつた。

山口時代を回想した随筆「私の生れ故郷山口を偲ぶ」の中で、父隆吉が山形（県令）から山口（県令）に転任したことから「山」の字を重ねて出と命名されたことや随筆「私の書齋」の中で、京都の邸宅は、父が木戸孝允と同門の関係で維新後推輓に与った前世の因縁により、木戸邸の一部分を譲り受け移築したものであると述べている。

また、親交の深い大山澄太の依頼により、大山編纂による種田山頭火の『其中日記』や『あの山越えて』の序文を書いている。その中で、山頭火とは「同郷人めいた一種の關係」で、「生れ故郷の回想も手伝つて」「山頭火ファンになったとも述べている。

以上のように、著作の随所に山口にまつわる事柄が見られ、山口時代は僅かであったが、新村にとっての山口は、生まれ故郷であり、終生忘れ得ぬ懐かしい場所であつたと言えよう。

他にも数多くの随筆があり、星座に関する随筆や語源に関する随筆など三十点が、柳田國男や吉村冬彦、齋藤茂吉の著作と共に『現代日本文学全集』（改造社）に収録されている。

新村には、歌集『重山集』『雨月』『牡丹の園』及び遺歌集『白芙蓉』がある。和綴じの帖面九十六冊には墨書の詠草が毎日書き込まれており、最晩年の十年間の歌だけでも数万首にのぼると言われている。自らの歌道の歩みについて「ときには保守、または伝統墨守、ときには模倣ないし規範従順」「己を知り、己を待み、初めから主義とか主張とかをもたず、独歩、独楽」「流派に属せず、単に古今を師として、天地を仰ぎ、孤負もせず、和協をもつぱらとなし」と述べている。即ち「善良なる平凡人たらんことを期するだけ」というのが一貫した信条であつた。そんな新



昭和22年6月9日(陛下御前での座談のあと) 右より、新村出、川田順、谷崎潤一郎、吉井勇 (重山文庫所蔵)

村が主に歌の題材に選んだのは、常日頃愛でた草花や星などの自然界、さらには偕老を誓った妻や慈しんで止まない子や孫である。

ふるさとの周防のくいのマルメロを
かぐのこのみと味はふ吾は
日うららか妻子ら孫らまどゐして
吾を慶ぶそのさきはひを
生れ故郷を

新村は、谷崎潤一郎や川田順、吉井勇と座談会をもつなど、文学者とも広く交流があつた。

(文・安光裕子)

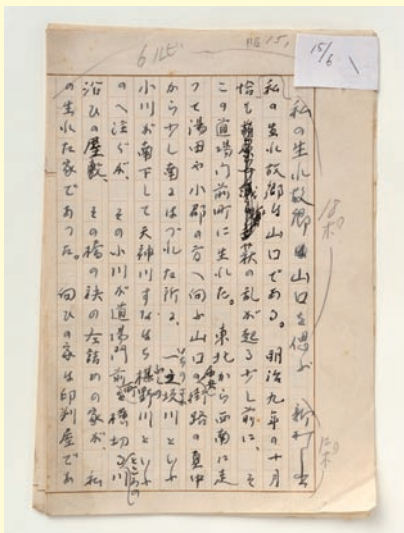


木戸孝允より譲り受けた京都の邸宅 (現在、重山文庫)

私の生れ故郷山口を偲ぶ

私の生れ故郷は山口である。明治九年の十月恰も萩の亂が起る少し前に、その道場門前町に生れた。東北から西南に走つて湯田や小郡の方へ向ふ山口の中央街路の真中から少し南にはづれた所に、一之坂川といふ小川が南下して天神川すなはち榎野川といふのへ注ぐが、その小川が道場門前町を横切るところの川沿ひの屋敷、その橋の袂の左詰めの家が、私の生れた家であつた。向ひの家は印判屋であつたことだけ覚えてゐる。その店の前にはよく遊びにいつて可愛がられもしたことを覚えてゐる。後年その地を尋ねていつて夢がさめたのであるが、その小川はもつと大きな川であつたと記憶してゐたのであつたが、せまくて而も浅い小川であつたのが不思議でたまらない。(後略)

(婦人之友 第三十四巻第六號 (昭和十五年))



自筆原稿 (婦人之友社所蔵)

新村 出 年譜

(提供・安光裕子)

明治9 (一八七六)年	一歳	10月4日、関口隆吉と静子の次男として、山口市山口町道場門前町(現・山口市道場門前)一ノ坂川左岸辺に生まれる(元の安部本陣)。関口家は代々今川家に仕え、徳川家旗本。隆吉は、二代目の山口県令。
明治13 (一八八〇)年	五歳	山口県師範学校附属小学校に入学する。この頃、父より小さな机を貰い、生涯愛用する。
明治14 (一八八〇)年	六歳	2月、静岡尋常中学校に入学する。母と姉妹と共に山口より上京する。
明治20 (一八八七)年	一二歳	12月20日、新村家の養子となる。養父猛雄は、徳川慶喜公家扶。
明治22 (一八八九)年	一四歳	この頃、歌を学び始める。
明治23 (一八九〇)年頃	一五歳頃	9月12日、推薦されて第一高等中学校予科二級に入学する。この頃、国文を習った落合直文教授から「歌道の啓蒙」を受ける。
明治25 (一八九二)年	一七歳	9月、東京帝国大学文学部博士課程に入学する。教授上田万年、教師フロレンツの二師の下で言語学を修める。
明治29 (一八九六)年	二一歳	7月10日、東京帝国大学文学部博士課程卒業。明治天皇より銀時計を下賜される。
明治32 (一八九九)年	二四歳	11月10日、荒川重平(旧幕臣)の長女豊子と結婚。
明治33 (一九〇〇)年	二五歳	2月7日、東京高等師範学校教授に就任する。
明治35 (一九〇二)年	二七歳	8月24日、東京帝国大学文学部助教授に兼任する。
明治37 (一九〇四)年	二九歳	1月25日、京都帝国大学文学部助教授に兼任する。
明治40 (一九〇七)年	三二歳	5月17日、京都帝国大学文学部助教授に兼任する。言語学講座を担当。
明治42 (一九〇九)年	三四歳	4月1日、京都文学会にて『藝文』を発刊。6月29日、京都帝国大学総長の推薦に基づき文学博士を授与される。
明治43 (一九一〇)年	三五歳	5月12日、長崎からの帰途、山口に立ち寄る。旧宅趾を回顧し、山口市立山口図書館を訪ね、毛利公の名苑を佐野友三郎図書館長らと訪問する。
大正6 (一九一七)年	四二歳	12月、京都市小山中溝町に定住する(現在の重山文庫の所在地)。その邸宅は、木戸孝允が鴨川の西畔に居住していた家の一部分を譲り受け、移築したものである。
大正12 (一九二三)年	四八歳	10月3日、福岡からの帰途「山口に寄り帰途」を刊行。26日夕ぐれ、即興の句「なつかしやうまれ故郷の初しぐれ」をつくり、下関で購入した『奥の細道』(岩波文庫)のトビラに記す。12月25日、『東方言語史叢考』(岩波書店)を刊行。
大正13 (一九二四)年	四九歳	8月19日、随筆30点が、柳田國男や吉村冬彦、齋藤茂吉の著作と共に『現代日本文学全集』第58篇(改造社)に収録される。
昭和2 (一九二七)年	五二歳	10月中・下旬、福岡からの帰途、長府尊攘堂や萩の史蹟などを訪ね、防府町三田尻(現・防府市)に宿泊する。正三位勲一等瑞宝章及び京都帝国大学名誉教授を授与される。
昭和6 (一九三一)年	五六歳	11月24日、日本音声学会会長に就任する。
昭和9 (一九三四)年	五九歳	6月1日、日本言語学会を創立し、会長に就任する。
昭和11 (一九三六)年	六一歳	5月28日、『私の生れ故郷山口を偲ぶ』(婦人之友)第34巻第6號)を発表。
昭和12 (一九三七)年	六二歳	4月、『歌集「重山集」(草木屋出版部)』を刊行。日本方言学会会長に就任する。
昭和13 (一九三八)年	六三歳	11月1日、『歌集「雨月」(私家版)』を刊行。
昭和15 (一九四〇)年	六五歳	6月15日、『歌集「牡丹の園」(白楊社)』を刊行。
昭和16 (一九四二)年	六六歳	11月1日、『歌集「雨月」(私家版)』を刊行。
昭和25 (一九五〇)年	七五歳	5月25日、『広辞苑』第1版(岩波書店)を刊行。
昭和27 (一九五二)年	七七歳	11月3日、文化勲章を授与され、同日京都名誉市民の表彰を受ける。
昭和31 (一九五六)年	八一歳	8月17日午後7時40分、永眠する。銀杯一組を下賜される。
昭和42 (一九六七)年	九二歳	8月17日、遺歌集『白芙蓉』(初音書房) 刊行。
昭和43 (一九六八)年		『新村出全集』全15巻(筑摩書房) 刊行。
昭和46 (一九七二)年、昭和四九 (一九七四)年		

※『新村出全集』(筑摩書房) 参照